

做 正 确 的 事 情

しうや りふかい

「畢竟、教えられずして世に流布している自然法爾の究竟の窮理學※に拠れば、所詮、世は畢竟なのだから、空觀などは持つ要がない、空ではないからだ」 ※ 後載の参考文献参照の事

「なるほど。空も、世俗に融通する色慾妄執情まみれの価値觀も同じ、いや、同じですらないという意味で同じようなもの、ですからね」

「だから死は怖れるに足らん、とも言える（逆も亦た真だが）」

「言えますが、言うは易く行ふは難い」

「さよう、さよう、妄癡著執は諸細胞に沁みつき、生は無明妄想に染まり切っていて、到底、皮血肉骨から抜けない」

「ま、それでもよいのですよう。それも空の諦觀ですから」

「さよう。されどもさようにそれも佳しこれも好しあれも善しとばかりは言っておられぬときもある。どれかを選んで良しとせねばならぬときがある。積極的に決めて、革めて逝かねばならぬときが様々な場面で起る。機に臨んで、様々な決断が必要だ」

「左右へ同時に進めませんか」

「右手で右手を握れないし、右目で右目も見られない」

「自分のものは、ですね。少し喻えが違いますが」

「言い間違えても言は正しく伝わる。真偽正誤妄不など差異がないから」

「だが関ヶ原で西軍と東軍の双方に同時に味方することはできない。どちらかを選ばなければ」

「屁とゲップも同時にできない。どちらかを選ばなければ。だがどちらかを選ぶためには選ぶ根拠が必要だ。確かな足場があって、そこに立脚し、その上に論を築き上げなくてはならない。でなくば根拠にならない」

「空中に在ってどこにどのように足を着けばよいでしょう」

「空中であることに問題はない。空だから抵觸しない。いかようであつても趣旨を損なうことがない。いや、逆に損なわないこともあり得ないくらいだ。つまり抵觸しないこともないとも言える」

「だから困る、つてのが話の流れだつたと思うんですが……」

「無方向、いや、非方向だからこそ逆にそれが追い風にもなるのだ。

何をしても空の意向には異叛しない。何もかも異叛だからだ。どちらかを正しいとして選んでも、空の実践である。一向差し支えない。差し支えないから、差し支えにならない。差し支えないしかない。一念に惟いを固定して固執し、足場を設けても一向差し支えない」

「何でもいいていいのですよね？ だからそれじゃ選べません。それじゃあ選べなくって困る、つて話じゃないですか」

「これは、これは。いやさ、道理もない、逆らいうのない原理に従うしかない。どうせ逆らえないのだから。右手で右手を握れないし、右目で右目も見られない、屁とゲップも同時にできない。そういうものは、そういう原理に従うしかない。外がない」

「そりゃあ、そうですが、実際、どのように考えればよいんですか。そんな例じゃ、参考になりません。甚深妙義をお伺いしたいものです」

「例えば、意識以外で思考はできない。論理以外で思考は進まない。考概なくして思惟は構築できない。意識に映るまゝに、論理で分析するがまゝにするしか選択肢はない。そう決断するしかない。既にいまこの決断がそうだ。実験検証や証左や確認以前であつても既に使用中だ。仕方ない。外がないから。

心を澄まし、心の声に随い、心の機働きのまゝに進む。すると大方、古代聖者の言に近附く。しかし一概にそう言うのは危険だ。無意識的に敢えて近附けてしまうこともあるし、近附くとそれ以上に検証しなくなる。常に批判は必要だ。批判されない者は腐敗する。共産主義が折れてしまったのは、労働者性善説を基幹とする思想にも問題があるが、一党の独裁という体制にも大きな大きな問題がある。仏陀でさえ師の言葉を鵜呑みにせず、自ら検証せよと言った。

よく整えし己こそ真に得難き掬ふ辺なりと言つてはいないか。

だが言つたとおり古人の言葉に近附いたからといって有頂天になつてはいけない。凡てを批判できるように自分を鍛えよと考えながらも又必ずや心の隅に止めておこう、思惟は自由ではなく、雨が降るよう自然現象だと。心も想いも。想つているよつな自分はない、と。

いずれにせよ、決断するしかない。飢えたまゝではいられないし、ましてや愛する者が苦しむのを放置はできない。ジャンバルジャンだ。四方上下もない怒濤の暴流氾濫に翻弄されれば竿を波瀾に差さして身体軀を支えずにはいられない。左右前後もない宙間に抛り出されては蠶紐であつても掴まずにはいられない。足場を求めて足掻き藻掻かずにはいられない。

どうしようもないのだ。たとえ一刹那であつても努力して深く考え惟い抜いて徹した末に正しいと思えたことをするしかない。それしかない。自然法爾、天然公理の本性に還り、龍のごとく肯んぜよ。著執する莫れ」

完

参考文献：【電気の做る影である『白紙』、液晶の上の（©2013年現在）。又はインターフェイス上の。又

は物象。又は印刷すればただの白紙㊦枚。】解説 より全文抜粋

「(二)に、『電気の做る現象である『白紙』、液晶の上の(AD2013年現在)。又はインターフェイス上の。又は物象。又は印刷すればただの白紙2枚。』という小説を擲く。

この作品の著作権は私にあるが、

この作品は小説ではない。非小説である。

この作品は文学ではない。非文学である。

この作品は芸術ではない。非芸術である。

この作品は作品ではない。非作品であり、

ただ事実ではない。何者でもない、今爰(二)に在る今其処に在るただ現実ではない。だが、現実って何だ。現実って、ええつと……………

只管(ひたすら)現実であつて、でも何も彼もいわゆる現実だし、特性も特定性もない、つていう特性もあるのか、あゝ、どうでも、この作品でなくとも、その辺にある物でも、世界の果てにある物でも、物でなくとも、上下左右方位、又は空間というような抽象的なことでも、概念・言葉又は思考・感情でも、何でも、ナンでも。

ただ事実ってだけ、電気の做(つく)る現象としての『白紙』、液晶の上の電氣的な現象として『白紙』の見掛を做すモノ。又はインターフェイス上の『白紙』の見掛。又は物象。又々々として印刷機に送れば、白紙2枚が出て来るという現象の原因となるモノ、物質 Material Physik、Φ?ous

しかし、事実、つて言つても、目に見えるものは、乱反射する光線の波長が網膜に当たつて視神経を通して脳に伝わり、脳がその波長に差異を設定し(註：波長に差異があるのではない。物理的な運動に現に差異が在るのではないかと反駁される方も居られるだろうが、実在の運動の差異は差異ではない。差異という価値概念の企画があつてその設定がなされ、同時に物象的な差異の企画及び設定があつて、初めて差(異)ができる。それらの原(もと)となるスキームが人間にア prioriに蔵されている)、色彩や陰影等々として解釈し、これが、事実、という事象として脳裏に現象するに過ぎない。復た音も鼓膜の振動をさう設定し解釈したもの。又皮膚筋肉血管内臓骨等々体起こつた出来事に対して、接触炎症痙攣切破穿孔崩壊腐敗侵蝕拒絶反応等々々々の差異の企画を做つてこれを設定し、危機求欲安寧等々の状況価値の差異の企画を做つてこれを設定し、苦悩痛痒喜怒哀樂恐怖不快等々の感受の差異の企画を做つてこれを設定し、存在という差異の企画を做つてこれを設定し、以上を以て意識となす。畢竟、人生という事実を做る。何でもない。何でもないというすら

一つの定義であり、またカタチであるから何でもないという定義に矛盾するという定義に嵌まるのもNGって言ってもそのNGって判定も定義に拠るもので何でもなくないから、いや、そう言っちゃうと、また定義だしカタチだし、だから何でもないじゃなくていい、あ、でもそれも『何でもない』っていう語義の定義に依拠してるか、って批判もカタチだし、何でもないもナイもなくもないでもなくなく、何でもなくでも構いやしないどうだっていい、「どうでも、」とてめえも候ソロー早漏

現実とは、これではない。差異たるもの、即ち本質性も数も形も重さも触感も匂いも味も空間占有性も意味も意義も理由も因果も真偽止謬実虚理妄妄不も存在も、做られたモノでしかなく、「それが何であるか」を問われても答へようがなく、原を糾しても、何も持っていない両手の掌(てのひら)を上に向けて、「ほら、これなんです、これが現実ってことなんです」って言うようなもので、喩えるなら、僧・眞巖が「この書物に何が記されているようにとも、この書は究竟の書である」と言えは、僧・龍鳳が疑義を呈し、「ならば、すべての書が究竟の書ということになってしまっではないですか」と言っても、眞巖は平然と、「それこそこの書が究竟であるゆえんである」と応え、そこにあるのは、只管、零(ゼロ)、つてか、そもそも厳密に言えは、原とか、結果とかいう、因果構成上の順序や関係間の差異も、ただ設定でしかないし……)ではないと言わざるを得ないものだし、だからただ事実で、ただ零で、空で、つまりやつぱりただ事実でしかなく、しかもこのような考え自体が、做られたモノ(構築物・捏造物)でしかなくて、しかも思考は、脳神経細胞の特定のイオン・チャネルが開かれて起る脳細胞膜の内外で電位の正負の関係の逆転、電気的な発火現象であるインパルスであり、インパルスが脳神経伝達物質の分泌を起し、特定の情動を生物に起こさしめた結果に過ぎない、という物的な現象(化学的な反応)ではない。とは言え、さような脳内現象の分析も観察に依拠し、観察は識別設定だ。と言っそれは論理的思考の運びなわけだが、論考って何だ、その運びとやらの運動のフォルムがそのかたちであるべき理由を、さようなかたちでもんの意味を、我々は全く知らないし、そもそもその理由云々とかっていう在り方、つか、セッティング？っていうのか、そういう運びっていう等々が既にわかんないし、論考の妥当性ってば論考で説明すんのは論考違反なんだろうし、でも論考未検証なら違反も違反じゃないんじゃないかな、って言ってもそれって、論考による判断だよな？、え、じゃ、……っていうか、そもそも俺は何観て何解ってんのか、観て、かつ解ってつても、何解ってんのか、解ってるってナニ、って、ンなコトに、どう答えられるの、え、じゃ、どーすんの、あ、もう、わかんない……、え、これで終わり？、まじで？、えっ、このまんまでいいの？、え、どーすんの、こんなで？、ええっ、二、啞然、次の言葉がない、い、「あつ」と絶句したまん、二の句が出ない、続けない、終にこのまん途絶え、未遂不収……